「私のイチバンボシ」第5話

水瀬真理佳

○宮本家・玄関（夜）

えま、ドアを開けて帰って来る。

えま「ただいま～」

玄関には見慣れない靴が四足並ぶ。

えま「誰か来るんだっけ？　そんなこと言ってなかったけど……」

えま、廊下の奥を見つめる。

○同・リビングダイニング（夜）

えま「ただいま～。ママ誰か来てるの？」

えま、リビングを見てスクールバッグを床に落とす。

ユニクラウン「はじめまして！　ユニクラウンです！」

えま「すみません、家間違えましたぁ……」

えま、バッグを拾って部屋を出ようとする。

翼「ちょっ、おーい！」

凛太郎「ごめんね。驚かせちゃったよね」

と、えまに笑いかける。

えま「うそ……凛くん……？」

と、口元を手で押さえて感動。

凛太郎「ねぇどうしよう。反応が可愛すぎる」

翼「ちょっとちょっと！　俺もいるよ！」

翼、えまと握手する。

えま「どうしよう。もうこの手洗えない！」

と、喜ぶ。

悠真「突然ごめんね。はじめまして、佐々木悠真です」

えま「もちろん存じ上げております！　はじめまして。宮本えまです！　どうしよう、生のささがいる……」

と、うっとり見つめる。

柊也「みんなその辺にしとけー」

と、陽斗の方を見る。

陽斗、面白くなさそうにしている。

凛太郎「（ニヤニヤしながら）ほら。はるピーも自己紹介しないと」

陽斗「……俺はいいって」

と、拗ねる。

えま「ちょっと待ってください。これは一体どういう……？」

美香「凛くんから遊びに行っていいですかって連絡が来たのよ」

美香、料理を運びながらリビングに来る。

えま「え？　ますます謎が増えたんだけど！」

えま、助けを求めるように陽斗を見る。

陽斗「実は……」

○（陽斗の回想）事務所・レッスン室

陽斗、床に座って休憩中。

着ているのはえまからもらったTシャツ。

翼、陽斗の隣に座る。

翼「陽斗、最近なんかいいことあったしょ？」

陽斗「いや？　特にいつも通りだけど……」

悠真「みんなで話してたんだ。はるピーなんか最近楽しそうっていうか、調子良さそうだなって」

陽斗「まじ？　自分ではあんま分かんないけど」

凛太郎「（ニヤニヤしながら）社長の家、そんなに楽しいの？」

柊也「おい凛。直球すぎだって」

メンバーもニヤニヤする。

陽斗「え、なに。コワイコワイ」

翼「俺らも一回会ってみてーなぁ。社長の娘さん」

凛太郎「名前なんて言うの？」

陽斗「名前？　……えまだけど」

凛太郎「ていうか、社長の家遊びに行っちゃおうよ！」

と、スマホを取り出す。

柊也「友達みたいなノリで言うなよ」

悠真「でもはるピーから奥さんに聞いてもらえばワンチャンありそうじゃない？」

翼「じゃあ陽斗よろしく！」

陽斗「嫌だよ。居候の分際で人呼ぶとかヤバいだろ。しかも騒がしいのが四人も」

翼「おい。誰が騒がしいって言うんだよ！」

陽斗「お前が一番な？」

翼「あ、俺か」

と、笑う。

凛太郎「ねぇ！　美香さんいいって！」

と、美香とのメッセージ画面を見せる。

陽斗「え!?　凛、美香さんの連絡先知ってたの？」

翼「ナイス凛！」

柊也「楽しみだな～」

凛太郎「ちゃんとご挨拶しないとね」

翼「うちのはるちゃんがいつもお世話になってますって」

悠真「えまちゃんの前ではるピーがどんな感じなのかも気になるし」

陽斗、やれやれとため息をつく。

○宮本家・リビングダイニング（夜）

えま「それで今に至ると……」

陽斗、頷く。

えま「（真剣に）陽斗くん。ちょっと来てください！」

えま、陽斗の背中を押してリビングを出ていく。

○同・廊下（夜）

えま「どういうことですか！　連れてくるなら事前に教えてくれれば良かったのに！」

陽斗「ごめんって。驚かせたいからえまには秘密にしろって言われて」

えま「もぉー！　学校だったからメイク全然だし髪もボサボサだぁ」

えま、スマホのインカメを見ながら前髪を直す。

陽斗「……別に、化粧とかしなくてもそのままでいいじゃん……」

えま「ダメです！」

と、陽斗を鋭く見る。

陽斗、納得いかない顔。

翼「おーい。何イチャついてんだよお二人さ

ん。美香さん呼んでるぞ」

と、呼びに来る。

陽斗「別にイチャついてないから」

と、笑いながら翼とリビングに戻って行く。

えま、陽斗と翼の後ろ姿を見ながら、

えま「もう！」

と、自分の部屋に入る。

○同・えまの部屋（夜）

えま、両手に服を持って絶望する。

えま「どうしよう。しっくりくる服が全然ない！　今から買いに行く……は、さすがに無理か」

えま、クローゼットから大量に服を出してベッドに並べる。

陽斗の声「……別に、化粧とかしなくてもそのままでいいじゃん……」

えま「いつも綺麗な女優さんばっかり見てるくせに！」

ドアをノックする音。

えま「はーい」

美香の声「えまー？　みんな待ってるよ」

えま「うん！　今行く！」

えま、着替え始める。

○同・リビングダイニング（夜）

テーブルには豪華な料理が並ぶ。

翼「すげー！」

悠真「超美味そう！」

美香「嬉しい～！　みんなが来るから久しぶりに張り切っちゃった！」

と、料理を持ってくる。

○同・キッチン（夜）

陽斗、キッチンで棚から食器を取る。

柊也「これ持ってけばいい？」

陽斗「うん、ありがと柊也」

柊也「それにしても、えまちゃんびっくりしてたな」

陽斗「うん。でもえま超喜んでたよ」

と、拗ねたように言う。

柊也「ふーん」

と、陽斗を見ながら頷く。

陽斗「だからこの間から何その顔」

柊也「俺は元々こういう顔だって」

と、笑いながらお皿を持っていく。

○同・リビングダイニング（夜）

陽斗と柊也がお皿を持ってくる。

宮本は席に着いている。

凛太郎と翼と悠真はカーリーと遊んでいる。

美香「お客様に運ばせてごめんね。ありがとう」

陽斗「いえ。こちらこそ急に押しかけてすみません」

美香「いいのいいの。凛くんから連絡もらったら嬉しくなっちゃって」

宮本「なんで凛太郎が美香の連絡先知ってる

んだ？」

宮本、凛太郎を怪しむ。

凛太郎「うわぁ！　社長ヤキモチ妬いてるぅ！」

悠真「さすが愛妻家！」

宮本「（嬉しそうに）まぁな」

凛太郎「社長にもメッセージ送りましょうか？」

宮本「いい！　いらない！」

一同、笑う。

えま、ダイニングに入って来る。

美香「さ！　食べましょ！」

えまと美香とユニクランも席に着く。

宮本「それじゃあ乾杯！」

一同「かんぱーい！」

えま以外は酒の入ったグラスを持って乾杯。

翼「改めて、ユニクラウンの杉野翼です！」

悠真「佐々木悠真です！」

凛太郎「凛太郎です！」

柊也「リーダーの加藤柊也です！」

陽斗「……」

メンバー、陽斗を見つめる。

陽斗「……田中陽斗です」

えま「（緊張しながら）皆様のご活躍は拝見してます！　ユニクラウンファンクラブ会員番号32673。宮本えまと申します！」

翼「すげぇ。会員番号まで言えるんだ！」

凛太郎「カワイイ！　なんか面接みたいになってる」

翼「宮本家の皆様、うちの陽斗がいつもお世話になってます」

悠真「はるピーってここだとどんな感じ？」

と、えまに質問する。

えま、瞬きをして固まる。

悠真「？」

えま「まだこの状況が信じられなくて……さらに話しかけてもらうなんて、ほんと夢みたいです！」

と、嬉しそうにする。

陽斗、「え？」という顔でえまを見る。

柊也「悠真、感動してもらえて良かったな」

悠真「いや嬉しいわ。はるピー担って聞いてたけど、これワンチャン俺に担当替えあるよね？」

陽斗「いや、ないから！」

と、強めに突っ込む。

翼「やっぱさ、毎日会えると慣れるしさ、陽斗大したことないっしょ？　そろそろ飽きてきたっしょ？」

凛太郎「（笑いながら）飽きてきたはヤバい。はるピー泣いちゃうよ」

と、陽斗の頭を撫でる。

陽斗、不機嫌そうな顔。

えま「全然そんなことないです！」

えま、必死に否定。

柊也「だって！　良かったな陽斗」

陽斗「……お前らマジふざけすぎ！」

一同、笑う。

×　×　×

みんなでユニクラウンのライブDVDを観ている。

翼、テレビの横で踊り出す。

えま「え！　どうしようヤバい！」

えま、口元を押さえて感動する。

陽斗、えまを見て、

陽斗「（対抗するように）……俺も踊る」

と、立ち上がるがふらつく。

凛太郎「はるピー大丈夫？」

柊也「座っときな」

と、陽斗をソファに座らせる。

悠真「まぁはるピーは家ここだし、もう寝るだけだからね」

柊也「俺らもそろそろ失礼しよ」

凛太郎「だね！」

と、立ち上がる。

翼、ソファに座る陽斗の膝をトントンとする。

翼「じゃーな陽斗。いい夢見ろよ」

陽斗「……ん」

と、眠そうに手を挙げる。

○同・玄関（夜）

ユニクラウン「おじゃましました！」

美香「また来てね！」

宮本「気を付けて帰れよ」

凛太郎「えまちゃんおやすみ！」

えま「おやすみなさい！」

えま、手を振って見送る。

○同・リビングダイニング（夜）

陽斗、ソファの背もたれに頭を預けて目を閉じている。

えま、水の入ったコップを持って陽斗の隣に座る。

えま「陽斗くん大丈夫ですか……？」

陽斗、ゆっくり目を開ける。

陽斗「いつもはこんなになんないのに。なんか今日は酔った」

えま「これ、お水。良かったら」

と、陽斗の前にコップを見せる。

陽斗、頷いてコップを持つえまの手を上から握って飲み始める。

えま「！」

陽斗「ありがと」

と、えまの手に触れたまま目を閉じる。

えま「あの、コップ……」

陽斗「（寝息）」

えま、コップを持ち替えてテーブルに置く。

えま「あのぉ、陽斗くん？」

陽斗「（寝息）」

えま、手を離そうとすると、陽斗の頭が肩に乗る。

えま「ウソ……」

えま、そーっと肩を見る。

気持ちよさそうに眠る陽斗。

えま「あのぉ。田中さん？」

陽斗「（寝息）」

えま「……陽斗くん？」

陽斗「んッッ……」

えま、笑いを堪える。

陽斗、気持ちよさそうに眠る。

えま、陽斗の頭を支えながらソファの背もたれに背中をくっつける。

えま、嬉しそうにはにかむ。

○同・リビングダイニング（朝）

宮本、マグカップを持ってダイニングに入って来る。

ソファを見ると、えまと陽斗が抱き合うように横になって眠っている。

宮本「なんだこりゃーーー！」

と、大絶叫。

えまと陽斗、目を覚ます。目が合って固まる。

二人には毛布がかけられていて、陽斗がえまの腰に手を添えている。

えまと陽斗「わっ！」

と、起き上がって離れる。

美香「もう、朝から大声出さないでよ～」

美香が部屋に入って来る。

宮本「ま、まさか。一晩中!?」

と、震える。

美香、えまと陽斗を見て察する。

美香「はい落ち着いてパパ。おはよ」

と、宮本をダイニングのテーブルに連れて行く。

美香「(小声で)なだめておくから大丈夫」

と、えまと陽斗に向かってウインクする。

えまと陽斗、頷いてリビングを出る。

宮本「ちょっと待て陽斗！　これは社長として、いや父親としてちゃんと話を聞かないと！」

美香「話なら私が後で聞いておくから」

宮本「コラ待て陽斗！　えまも！　逃げるな！」

美香「もういいから。あんまり言うとえまに嫌われるわよ」

宮本「でも……！」

と、美香に訴える。

美香、ニコニコしながら朝食の準備をする。

○同・廊下（朝）

えまと陽斗、互いの部屋の前で立ち止まる。

陽斗「あのさ。昨日のことだけど……」

えま、握ったドアノブを見つめたまま、えま「あのっ……なんかごめんなさい！」

えま、勢いよく部屋の中に入りドアをバタンと閉める。

陽斗、唖然としながら立ち尽くす。

○同・えまの部屋（朝）

えま、ドアを閉めて呼吸を整える。

えまM「陽斗くんの頭が肩に乗ってただけなのに！　どうしてあんな体勢に!?　一体何が起こったの!?」

えま、頭を抱える。

○同・陽斗の部屋（朝）

陽斗、ゆっくりとドアを閉める。

陽斗M「あの反応。絶対俺がなんかやらかしたんだよな!?　もしかして、あれ……」

○（陽斗の回想）同・リビングダイニング

（深夜）

陽斗、ソファで目を覚ます。

陽斗「ん……」

二人は肩を寄せ合うように、えまの頭が陽斗の頭に乗っている。

陽斗、えまをソファに寝かせ、自分もそのまま横になる。

○同・陽斗の部屋（朝）

陽斗「うわ、やっぱ俺か……」

と、頭を抱えながらしゃがみ込む。

○同・キッチン（朝）

美香、ニコニコしながら朝食の準備をする。

○（美香の回想）同・廊下～リビングダイニング（深夜）

美香、リビングの電気に気づく。

美香「まだ起きてたのー？」

と、リビングに入る。

えまと陽斗、ソファで向かい合って眠っている。

美香、にっこり笑って毛布を二人にかける。

○同・リビング（朝）

えまと陽斗と類がテーブルを囲む。

類、えまと陽斗を怪しみながら食べる。

美香「はい、これも良かったら食べてね」

美香、フルーツを持って来て座る。

類「そういえば、田中くん昨日の夜は大丈夫

だったわけ？　随分酔ってたって聞いたけど」

陽斗、突然むせて咳き込む。

類、目を細めて見る。

美香「あら、大丈夫？」

えま、水の入ったコップを差し出す。

陽斗、コップを受け取る時にえまと手が触れる。

えま「っ！」

えま、驚いてコップを離しテーブルに水がこぼれる。

えま「あっ！　ごめんなさい！」

美香「あらやだ。何してるのー！　陽斗くんかかってない？」

美香、陽斗にティッシュを渡す。

陽斗「大丈夫です。俺がちゃんと受け取らなかったので。すみません」

陽斗、ティッシュでテーブルや食器の水分を拭きとる。

美香「待ってね、今タオル持ってくるから」

と、立ち上がる。

えまも濡れた食器をティッシュで拭く。

類、えまをじっと見つめる。

美香「ちょっと！　類も何かしてよ！」

類「おかしい」

美香「なにが？」

類「この二人。さっきから怪しすぎる。昨日、なんかあったの？　母さん何か知ってる？」

えまと陽斗、ドキッとする。

えま「な、何言っちゃってんのお兄ちゃん」

陽斗「そうですよ。アハハ……」

美香「私、夜中に起きちゃったけど、みんな寝てたわよ？」

えまと陽斗「えぇッ!?」

美香「ん？　どうかした？」

と、美香の方を見る。

と、にっこり笑う。

えま「いや別に……」

陽斗「なんでもないです……」

類、さらに目を細めて怪しむ。

美香、楽しそうにタオルを取りに行く。

○同・玄関（朝）

陽斗が靴を履いていると類がやって来る。

陽斗「あ、すいません」

と、どこうとする。

類、ニコニコしながら陽斗に顔を近づける。

陽斗、顔を引きつらせながら後ろにのけ反る。

陽斗「あの……」

類「一応聞くけどさ？」

陽斗「は、はい」

類「酔った勢いで、えまのこと押し倒したり〜とか。田中くんに限ってまさかそんなことしてないよねぇ？」

陽斗「もちろんです！　そんな押し倒すとかはしてないです！」

類「押し倒すとか『は』ぁ!?　なに、それ以

外は心当たりあるんだ？」

陽斗「いや、違いますよ！　そんな、まさかね……あはははは」

類「そうだよね？　あはははは。ごめんね疑っちゃって」

二人、笑って誤魔化す。

類「くれぐれも頼むよー田中くん」

類、満面の笑顔で陽斗の肩をポンポンとして家を出る。

陽斗「はい……」

と、困った顔で閉まったドアに向かって呟く。

○テレビ局・楽屋

くつろぐユニクラウンのメンバー。

陽斗、鏡を見ながら髪を確認する。

他のメンバーはスマホを見ている。

悠真「そういえばはるピー昨日大丈夫だった？　珍しく酔ってたけど」

陽斗、鏡越しに悠真を見る。

陽斗「あぁ……うん」

翼「ん～？」

と、陽斗をじっと見る。

翼「なーんか様子がおかしい」

と、陽斗の後ろに立ってうち肘固めをする。

翼「秘密はなしだぞー！」

凛太郎「はけはけー！」

と、ヤジを飛ばす。

陽斗、翼の腕を叩く。

陽斗「待ってムリムリギブっ！」

翼、腕を緩める。

陽斗、呼吸を整える。

メンバーが集まって陽斗をじっと見る。

陽斗「……みんなが帰った後もソファで死んでたんだけど。気づいたら朝になってて、えまと一緒に寝てた」

柊也「え」

悠真「それって」

翼「絶対アウトなやつぅー！　おまわりさー

ん！」

と、叫ぶ。

柊也「ほんとに警備の人くるからやめろ」

と、笑いながら翼を叩く。

凛太郎「待って。その前に、はるピーってえまちゃんのこと呼び捨てにしてたっけ？」

悠真「この間も呼び捨てだったよ」

凛太郎「マジか！」

柊也「陽斗、本当に記憶ない感じ？」

陽斗「夜中目が覚めたら俺がえまの肩に寄りかかって、えまの頭が俺の頭に乗ってたから寝心地悪いだろうなと思ってソファに寝かせて……」

悠真「それで？」

陽斗「俺も、そのまま横になった……」

翼「全部覚えてんじゃねーか！」

陽斗「いや、夢かと思ったんだって！」

翼「そんなロマンチスト装うったってそうはいかない。田舎の母ちゃん泣いてんぞ」

と、陽斗の肩をトントンとする。

柊也「でもそのまま朝まで寝てただけでしょ？」

凛太郎「そうだね」

陽斗「だと思うけど……」

悠真「なんだ。良かった良かった。ただの添い寝だ」

陽斗「まぁ、うん……」

メンバー、顔を見合わせてニヤニヤする。

楽屋の音をノックする音。

翼「はーい」

美玲の声「失礼します」

山口美玲（28）が入って来る。

美玲「山口美玲です。今日はよろしくお願いします」

柊也「こちらこそ、よろしくお願いします」

美玲、陽斗の方を見てニコッと笑う。

美玲「失礼しました」

と、ドアを閉める。

翼「陽斗の方しか見てなかったな」

凛太郎「山口さんってはるピーとドラマ共演したんだっけ？」

悠真「そうそう。まだ俺らはデビュー前だったよね。主人公カップルたちの学生時代役」

柊也「お似合いって話題だったよな」

翼「未だに二人が絶対付き合ってるってネットで考察されてんの知ってる？」

陽斗「俺、彼女の連絡先も知らないんだけどね」

悠真「聞かれなかったの？　聞かれたでしょ？」

陽斗「どうだっけな……」

翼「（笑いながら）お前マジさ」

陽斗「ん？」

柊也「いーんだよ。これが陽斗の良さだから」

陽斗、わけがわからないという顔。

○同・トイレ前

陽斗、トイレから出てくると美玲が立っている。

美玲「あ！　陽斗くん！」

陽斗「……お疲れ様です」

美玲「お疲れ様――！　ドラマ見てるよ。忙しそうだね」

陽斗「……いえ、そんなですよ」

美玲「もうすぐライブでしょ？　ユニクラウンはチケット全然取れないって噂だよ。ねぇ、もし良かったら関係者」

大和の声「あ、陽斗――！」

大和の声で美玲の声がかき消される。

瀬名大和（26）が手を振りながらやって来る。

大和「山口さんお久しぶりです！」

美玲「久しぶり」

大和「陽斗こんなとこいて大丈夫かよ。杉野が探してたぞ」

陽斗「マジか。すいません桐谷さん。これから移動あって」

美玲「ごめんね引き止めちゃって。頑張ってね！」

大和「割り込んじゃってすみません。コイツ連れて行きますね」

陽斗と大和、軽くお辞儀して歩いて行く。

美玲、二人の背中を見つめる。

○同・廊下

大和、陽斗の肩に手を回して歩く。

陽斗「大和なんでここに？」

大和「俺らこれからレギュラーの収録。んで、局の中散歩してたらなんか困ってる陽斗見つけたから」

と、ニカッと笑う。

二人、エレベーターに乗り込む。

○同・エレベーター内

陽斗と大和、壁に寄りかかって会話。

陽斗「大和って山口さんと仲いいの？」

大和「いや全然？　前に一回番組一緒になったくらい」

陽斗「それであんなに……やっぱ大和はすごいな」

大和「お前がぎこちなさすぎ。ドラマ一緒にやってたじゃん。ほんと、ぐいぐいこられるの苦手だよな」

陽斗「人見知りなんだよ……」

と、恥ずかしそうに言う。

エレベーターが止まって扉が開く。

大和「じゃあ俺こっちだから」

と、陽斗と反対方向を指す。

陽斗「うん。助かった」

大和「ライブ楽しみにしてる。みんなで見に行くから！　無理しすぎんなよ」

陽斗「うん！　ありがと！」

○高校・食堂内

生徒で溢れている食堂内。

えまと桃香、お盆を持って列に並ぶ。

桃香「それで話したいことって？　何かあった？」

えま「それがね。私、陽斗くんと……」

桃香「陽斗くんと……？　キスでもした？」

えま「違うよ！」

桃香「じゃあなに？」

えま「寝てた……」

桃香「えぇっ!?」

桃香の声が食堂に響き渡り、食堂が静まりかえる。

えまと桃香、「すいません」と謝る。

桃香「え、一応聞くけど。寝てたってどっちの意味？　ほら、スリープなのかそうじゃないのか、さ。そこ大事じゃん？　全然意味変わってくるから」

えま「スリープに決まってるじゃん！　一晩中添い寝してたの！」

桃香「だよね、良かったぁ。でもなんでそんなことになったの？」

えま「陽斗くんお酒飲んで酔ってて、最初はね私の肩に頭こうやって預けて寝てたの。それで私もいつの間にか寝ちゃったみたい

で」

桃香「ふんふん」

えま「でも朝起きてみたら目の前に陽斗くんの顔があって、二人ともソファに横になってて、陽斗くんの手が私の腰にあって」

えま、ジェスチャーをする。

桃香、頷きながらラーメンを受け取る。

桃香「なるほどね。抱き枕まではいかないけど、でもそんな距離感で一晩中寝ちゃってたわけだ。しかもどうしてそうなったのか分からないと」

えま「そう！　そうなの！」

えま、カレーを受け取って桃香と席に座る。

えま「私が大げさに考えすぎなのかなぁ」

桃香「でもこれぱっかりは田中さんに聞いてみるしかないよね」

えま「何があったか覚えてますかなんて聞けなくない!?　こんな意識して引かれそう」

桃香「じゃあ何事もなかったように今まで通

り過ごす？」

えま、口を動かしながら首を横に振る。

桃香「じゃあ、聞かないとね」

桃香、ラーメンを冷まして麺をすする。

えま、困った顔をする。

○同・教室

えま、ペン回しをしながら口をへの字にして窓の外を眺める。

教師、黒板に板書する。

教師「ここ重要だぞー。テストにも出すからなー」

クラス、ざわざわする。

えま、外を見続ける。

○ミラベル・店内（夜）

えま、難しい顔をしてテイクアウト用のコップを袋から出す。

勇輝、えまをチラチラ見る。

勇輝「なんでそんな難しい顔してんの？」

えま、作業の手を止める。

えま「あのさ。勇輝は私とこんな風にくっついて寝れる？」

えま、ジェスチャーをして見せる。

勇輝「はぁ？　なんだよその質問」

えま「いいから！　これが重要なの！」

勇輝「……いや。そもそも二人きりで同じ部屋で寝るっていうシチュエーションになんないだろ。子供じゃないんだし、付き合ってるわけじゃないんだし」

えま「……そうだよね。しないよね普通。やっぱりあれは酔ってたからだよね」

えま、ブツブツ呟く。

勇輝「（変なやつ）」

勇輝も汚れた食器を食洗器に入れる。

勇輝「でも大人だったら違うのかもな。そんなの誰とでもできそう。俺はそうはなりたくないけど」

えま、手が止まる。

えま「……そうだよね」

えま、陽斗がよく座る席を見つめる。

えま「添い寝なんて普通か。大人だし、芸能人だし」

と、ボソッと呟きため息をつく。

舞「二人ともありがとね！　もう上がっちゃっていいよ」

舞、バックヤードから出てくる。

勇輝「はーい」

えま、時計を見て血相を変える。

えま「やばい！　今日の夜会、陽斗くんたち出るんだった！」

えま、エプロンを脱ぎながらバックヤードに行く。

舞「夜会？　なんか危なそうだけど大丈夫かな」

勇輝「あー多分違います。テレビ番組の話です」

舞「あ～！　はいはい田中くんね」

えま「お疲れ様です！　お先に失礼しまっす！」

えま、制服姿でバックヤードから声をかける。

舞「気を付けてね～」

えまがバタバタと走って行く音。

勇輝、フッと笑う。

勇輝「なんだ、元気じゃん」

舞、勇輝を横目で見る。

舞「なに、優しいじゃーん」

勇輝「まぁ、大事な同期なんで」

と、ドヤ顔をする。

○宮本家・玄関（夜）

えま、バタバタと玄関に入って来る。

えま「ただいまー！」

カーリーが走って来る。

えま、靴を脱ぐ。

えま「ごめんカーリー！　急がなきゃいけないから！　ほら、リビング行くよ！」

えま、カーリーとリビングへ走って行く。

○同・リビングダイニング（夜）

えま、ダイニングに滑りこんでテレビをつける。

えま「良かったぁ！　セーフ！」

えま、ソファに座る。

えま「カーリーおいで！」

えま、カーリーを抱き上げる。

ちょうど番組が始まる。

番組MCの有吉（49）と櫻井（42）、陽斗、翼が座って歓談。

有吉「田中くんははじめましてよね？」

陽斗「そうですね。僕はずっとテレビで見させていただいてたのであんまりはじめましてな感じはしないんですけど」

櫻井「杉野くんはね、前に来てくれたよね」

翼「はい！　色々話させていただきまして！」

有吉「（ニヤニヤしながら）いやぁ、田中くん来てくれて、正直やっと本物のユニクラウンに会えたって感じするね」

陽斗「アハハハ！」

と、手を叩いて笑う

翼「なんすかそれ！　本物とか偽物とかないんですよ！　俺もちゃんとユニクラウンなので！」

と、立ち上がって反応する。

有吉「（笑いながら）あ、そうなの？　ごめん、ベンチメンバーかと思ってさ」

翼「アイドルにベンチとかないですから！　もう勘弁してくださいよ。でも、（カメラに向かって）ありがとうございます！」

と、頭を下げる。

櫻井「もうそういうとこがさ、バラエティ班なのよね」

有吉「そうそう」

えま「翼くん面白い」

と、笑う。

画面に戻って、

櫻井「実は今日ちょっとスタッフから事前にこの話を聞いてほしいって言われてて」

有吉「なんの話？」

櫻井「なんと、恋愛トークをお願いしますって」

有吉「えぇっ!?　事務所的にそんなこと聞いちゃって大丈夫なの？」

有吉、スタッフの方に聞く。

櫻井「あ、マネージャーが丸ってしてる」

有吉「あ、いいんだ。まぁ田中くんのはさ、みんな興味あると思うけど、ベンチくんの恋愛観とか知りたい人いるのかな？」

翼「あの有吉さん。ベンチくんってあだ名にすんのやめてもらっていいっすか？　俺のばあちゃん見てるんすよ！」

有吉「（笑いながら）あ、そうなの。おばあちゃん、ごめんなさいね。お孫さんベンチで頑張ってますよー」

と、カメラに向かって手を振る。

櫻井「違う違う」

有吉「違うか」

翼「有吉さぁぁぁぁん！」

櫻井「多分雑誌とかでも散々聞かれてると思

うけど。まずじゃあ田中くんの好きな異性のタイプは？」

陽斗「俺はあんまりコレっていうのはないんですよね」

有吉「例えばさ、可愛い系とか美人系とかは？」

陽斗「あーメイクが濃いのとかはちょっと苦手かもしれないです。あと香水がキツイとか」

櫻井「どっちかって言うと清楚な感じなのかな」

陽斗「ですかね。化粧が濃い人って、なんか強そうな感じがして、自分からいくのに勇気がいるというか……」

翼「こいつ人見知り激しいんですよ」

有吉「そうなの？　全然見えないけどね。でも自分からいきたいって思いはあるんだ」

陽斗「そうですね。そこは頑張ると思います」

櫻井「髪色とかは？」

有吉「細かいねぇ」

櫻井「俺じゃないんですよ。スタッフが！」

陽斗「（笑いながら）そうですね、綺麗な黒髪の人には惹かれます。これくらいの長さで、ちょっとウェーブかかってるような」

有吉「どうしよ。俺伸ばそうかな」

翼「なんで有吉さん田中のタイプ目指そうとしてるんすか！」

一同、笑う。

えま「陽斗くん黒髪好きなんだって」

えま、カーリーを撫でる。

画面に戻って。

有吉「俺ちょっとこれ聞きたいんだけどさ」

陽斗「はい！」

有吉「女性って結構何でもお揃いにしたがる人多いじゃない？　もし彼女にそういうのしたいって言われたらやれる？」

陽斗「あからさまにっていうのはちょっと恥ずかしいから、系統が一緒とか、アクセサリーがお揃いとか、そういう感じなら。でも彼女がどうしてもやりたいなら、僕も喜

んでやります」

櫻井「おぉ！」

有吉「もう模範解答だね」

と、拍手する。

翼「俺も全然！　彼女がやりたいことはなんでも叶えたいです！」

有吉「ちょっと今田中くんだから。杉野くんにも後でちゃんと聞くから！」

翼「忘れないでくださいね！」

櫻井「田中くんって異性のどういう仕草にキュンとするの？」

陽斗「例えば、これ櫻井さんもだと思うんですけど、僕たちユニクラウンはそれぞれメンバーカラーがありまして」

櫻井「はいはいありますね」

陽斗「うちだと杉野が青で僕が黒なんですけど。彼女の日常生活の中で僕のカラーの物がさりげなく増えてたり、あと発売日とかにCD買っちゃったって見せてくれたりしたら多分キュンとしちゃいますね。あとド

ラマとかバラエティをチェックしてくれたり。ちょっと恥ずかしいけど嬉しいです」

有吉「そうだよね。近しい人だったら田中くんがCDあげることもできるもんね」

陽斗「そうなんです！　そこを相手の人が積極的にやってくれると、キュンとします」

櫻井「黒っていいよね。集めやすいし、集めてもそんなに困らないし」

有吉「確かにね。山吹色とかだと難しいよね」

翼「メンカラ山吹色って渋いですね」

一同、盛り上がる。

櫻井「俺個人的に聞きたいのは、田中くんぶっちゃけ同業者の恋人はあり？」

陽斗「同業者……アイドルってことですか？」

櫻井「まぁ広くとって芸能人でいいよ」

陽斗「同業者だからナシとかはないです。でも仕事の時は仕事モードになってるのでみなさんあくまで仕事仲間なんですよね。まず恋愛対象でないというか。でも何かに一生懸命な人に惹かれるので、それが同業者

だったっていうのもあり得なくはないと思います」

有吉「よーし、仕事頑張ろっと！」

櫻井「有吉さんどんだけ田中に好かれようとしてんですか」

一同、笑う。

えま「ねぇカーリー。陽斗くんって彼女いるのかな？　やっぱり女優？　それともモデルかな？　まさかのアイドル？　スタッフさんもあり得るよね」

カーリー、すやすや眠る。

スリッパの音が聞こえてきてえまが振り返る。

陽斗が入って来る。

陽斗「……ただいま。まだ起きてたんだ」

えま「……おかえりなさい。今夜会見てて」

陽斗「あ、あー」

えま「……この時間までお仕事ですか？」

陽斗「……うん。ツアー近いからね」

えま「……そうですよね。お疲れ様です」

陽斗、ソファを指さして、

陽斗「……隣、座ってもいい？」

えま「ど、どうぞ」

えま、少しズレる。

陽斗、えまの方を向いてソファに正座する。

陽斗「……この前のこと、ちゃんと話したくて」

えま「は、はいっ！」

えま、陽斗を見て正座して向き合う。

陽斗「ごめん。正直メンバー帰ってからの記憶はほとんどなくて。俺がなんとなく覚えてるのは、夜中に目が覚めた時えまの体勢キツイだろうと思ってソファに寝かせて、俺も寝ぼけてたからそのまま一緒に横になっちゃったっていう……」

えま、話を聞きながら頷く。

えま「私は陽斗くんに水を飲ませた後、陽斗くんの頭が肩に乗っかって。起こそうと思ったんですけど、起こすのも可哀想で少し

様子見ようと思ってたら私もそのままいつの間にか寝ちゃって……」

陽斗、片手で顔を覆う。

陽斗「うわー。やっぱ原因は俺だ。ほんとごめん！」

と、ソファの上で土下座する。

えま、陽斗の体を起こす。

えま「そんなやめてください！　私の方こそごめんなさい！　ソファでそのまま寝かせるなんて……ツアー前って分かってたのに！」

えまも土下座する。

陽斗、えまの肩を持って起こす。

陽斗「いーや！　全部俺が悪い！」

えま「私です！」

陽斗とえま、見つめ合い、フッと笑う。

陽斗「じゃあ今回は仲直りってことでいい？」

えま「え？　私たち喧嘩してたんですか？」

陽斗「だってえま怒ってたんじゃないの!?

ほら、朝ごはんの時、俺の手が当たったの

嫌だったからコップ離したのかと……」

えま、ケラケラ笑う。

えま「まさか！　違いますよー」

陽斗「なんだ良かったー。完全に嫌われたか

と思った。マジで佐々担に替えられるかと

思った」

えま「そんなことあるわけないじゃないです

か！　陽斗くん心配しすぎ」

えま、ニコニコ笑う。

陽斗もつられて笑う。

○同・廊下（夜）

えまと陽斗の会話が漏れ聞こえている。

類、リビングの陰で壁に背を預けて腕

を組んで立っている。

美香が近づいてくる。

類、自分の口に人差し指を当てて「し

ー」っとする。

美香、そっとリビングを覗く。

美香「（なるほどね）」

と、頷きながら部屋へ戻って行く。

えまと陽斗の笑い声が聞こえる。

類、口角を上げる。

○同・玄関（朝）

類、スーツケースを持って靴を履いている。

美香と陽斗が見送り。

美香「来る時も帰る時も急ねぇ。今度帰って来る時はもっと早く教えてね」

類「うん。色々ありがと。父さんとえまにもよろしく」

陽斗「色々ご迷惑をおかけしました」

類、フッと笑う。

類「いーよ。田中くんが悪い奴じゃないことは分かったし」

美香「またそんな偉そうなこと言って！　えまに怒られるわよ」

陽斗「あはは」

類「じゃ！」

と、ドアを開ける。

美香「気を付けてね」

陽斗と美香、手を振る。

○タクシー・車内（朝）

類、後部座席でパソコンを開く。

画面にメッセージ通知がくる。

〈えま：気をつけてね。仕事頑張って。

今度このバッグ欲しい〉と高級ブランドのバッグの写真が送られてくる。

類、ニヤッとする。

〈類：もちろんいいよ。一緒に買いに行こ〉と送る。

〈えま：ネットで買って送ってくれればいいよ〉と返事がくる。

類「ほんと素直じゃないなぁ」

類、嬉しそうに笑う。

（了）